

県医師会の動き

副会長 吉本 正博

今年の夏は、「50年に一度の記録的な大雨」というニュースが何度も流れました。東日本では長雨と日照不足で夏野菜の価格が高騰しました。また、秋の味覚であるサンマが極端な不漁で、今年6年目を迎えるはずだった気仙沼のサンマフェスティバルも中止になりました。さらに、北海道の胆振地方沿岸の秋サケの定置網漁で、これまでにないほど大量のブリが水揚げされ、漁民も戸惑っているとのニュースもありました。これらは地球温暖化の影響と考えられていますが、某国の大統領は、それでも地球温暖化は科学者の「でっち上げ」だと言うのでしょうか。弾道ミサイルや核兵器を、まるで「おもちゃ」のように考えているとしか思えない某国の指導者もいます。当分、不安な日々が続きそうです。

8月19日(土)と20日(日)の2日間にわたり、ホテル日航熊本で**第48回中四九地区医師会看護学校協議会**が開催され、県医師会からはオブザーバーとして沖中芳彦 常任理事が参加しました。今回のシンポジウムのテーマは「医師会立看護学校の現状と展望～とくに准看護師課程の存在意義について～」であり、シンポジストの一人である釜蒞 敏 日医常任理事は、看護協会が看護師養成の4年制を政府に対して要望していることに触れ、「4年制の大学での看護基礎教育が法制化されると、経済的理由等により看護師希望者が大きく減少する可能性が高い」「教室の確保と専任教員等の人材確保も困難となり、養成所の閉鎖を招く」として反対の立場を明確にしています。総合討議の中で「准看護師の業務を明確にし、准看護師の位置付けをきちんとしてほしい」との要望が出されたそうです。

8月20日(日)には岡山県医師会館で「**中国地区学校保健・学校医大会**」が開催され、濱本史明 副会長と藤本俊文 常任理事が出席しています。

8月24日(木)には山口県総合保健会館で**集団指導**が実施され、約500名の出席がありました。また、それに先立ち山口県医師会で**新規第1号会員研修会**も開催されています。ただ、対象者38名中18名しか参加がありませんでした。研修会では医師会の概要説明、保険診療上の注意点、医療安全・医療事故防止についての説明が行われるのですが、新規会員にはぜひ聞いておいてほしい内容ですので、参加していただきたかったと思います。

臨床研修医交流会が8月26日(土)と27日(日)の2日間にわたり開催されました。今回が第9回目です。すっかり恒例の行事となりました。この会は臨床研修医の「他の研修病院の臨床研修医と情報交換できる場を用意してほしい」との要望を受けて、県医師会と山口県医師臨床研修推進センターの共催で開催することになったものです。内容は研修医から選ばれた世話人が企画しています。今年は講演2題のほかに、1日目にはグループワークと懇親会、2日目には症例検討会が行われました。グループワーク「研修医駆け込み寺」は、研修医自身が経験したヒヤリハット事例や失敗談についてグループ内で話し合い発表するという内容で、活発にグループ討議が行われていました。十分に親睦が図れたのではないのでしょうか。懇親会ではこれも恒例のビンゴ大会が開催され、各研修病院から提供された豪華賞品を前にして大変盛

り上がりました。参加した研修医は 79 名、懇親会には研修病院の院長、副院長、多数の研修指導医、また、県健康福祉部からも出席をいただきました。

8 月 31 日（木）に**社保・国保審査委員合同協議会**を開催しました。詳細については本号の記事をご覧ください。「データヘルズ時代の質の高い医療の実現に向けた有識者検討会」の議論の中で、支払基金の支部を集約化すべきとの意見が出されていますが、藤原 淳 社保審査委員長が全国審査委員長会議で確認を取ったところ、支部の集約化は考えていないとの厚労省関係者の回答を得たと、冒頭の挨拶の中で述べておられました。一方、土井一輝 国保審査会長は、診療報酬の審査の効率化と統一性の確保を名目に、全国統一かつ明確な判断基準を策定し、その判断基準に基づく精度の高いコンピューターチェックの実施を可能とするための作業が着々と進められていると、挨拶の中で触れておられました。

9 月 2 日（土）と 3 日（日）の 2 日間にわたり、大分オアシスタワーホテルで**第 27 回全国医師会共同利用施設総会**が開催され、沖中常任理事、船津浩彦 理事、前川恭子 理事が参加しています。医師会病院関係、検査・健診センター関係、介護保険関連施設関係の 3 つの分科会に分かれ、各々シンポジウムが行われたそうです。

9 月 3 日（日）、**第 145 回山口県医師会生涯研修セミナー**が開催されました。午前中に沢田泰之 東京都立墨東病院皮膚科部長による特別講演「デルマドローム 内科疾患に関わる皮膚症状」と、木浦勝行 岡山大学病院呼吸器・アレルギー内科教授による特別講演「肺癌診療 30 年を振り返って」が行われた後、午後には瀧本禎之 東京大学大学院医学系研究科医療倫理学准教授の「臨床倫理の実践～診療現場の医療倫理」と長谷川 学 内閣官房企画官の「地域医療構想・地域包括ケアと地域社会の未来」の 2 題の特別講演が行われました。午後の講演では、それぞれ専門医共通講習の「医療倫理」（必修）と「地域医療」（任意）の

単位を取得できることもあってか、120 名の参加者がありました。

台風 18 号が 9 月 17 日（日）に山口県に最接近し、県内に被害を及ぼす可能性があるとの予報を受け、県医師会では 9 月 15 日（金）に、台風 18 号に関しての防災対策の周知と医療機関に被害が発生した場合の連絡対応について、郡市医師会宛に FAX で事務連絡を行うとともに、17 日には災害担当の事務局職員が県医師会館に出務し、緊急時に備えた体制を取りました。

フランスのアベ・プレヴォーの小説「マノン・レスコー」を振付家ケネス・マクミランがバレエ化した「マノン」は、道徳観念のないマノンを、可憐に、妖艶にそして退廃した姿で演じるといふ、バレリーナにとっては、踊りだけでなく演技力でも観客を引きつけなければならない難しい役です。このバレエを 2005 年 7 月の英国ロイヤル・バレエ来日公演で見ました。16 日（土）はシルヴィ・ギエムが、17 日（日）はタマラ・ロホがマノンを演じました。ロホはまだ年齢が若かったせいもあり、可憐さはありましたが、マノン役としては物足りなさがありました。ギエムは最高としか言いようがありませんでした。踊りのすごさですが、表現力が半端ではありません。彼女がその後クラシック・バレエから次第にコンテンポラリー・ダンスに重心を移していったのも頷けます。2012 年 5 月 2 日（水）にはパリ・オペラ座ガルニエ宮で、オーレリー・デュポンのマノンを見えています。デュポンはバレリーナとして華があります。第 3 幕 流刑地の場では、第 1 幕、第 2 幕とは打って変わってみずばらしい衣装で登場するのですが、それでも無垢で可憐な少女と思わせる輝きがありました。彼女は 2015 年 5 月にパリ・オペラ座ガルニエ宮でのさよなら公演を最後に現役を引退しました。そのさよなら公演の演目が「マノン」でした。NHK の BS プレミアムでも放映されたのでご覧になった方もおられると思います。